

横須賀ならではの町並み保存

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-01-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉川, 郁 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/9967

横須賀ならではの町並み保存

吉川郁

- 1 はじめに
- 2 町並み形成の歴史
 - 2.1 遠州横須賀藩期の城下町
 - 2.2 商店街のにぎわいと衰退
 - 2.3 町並み保存の始まり
- 3 横須賀ならではの町並み
 - 3.1 コミュニケーションのとれる町並み
 - 3.2 うなぎ寝床
 - 3.3 平入
 - 3.4 柵里の似合う町並み
- 4 これからの町並み保存
 - 4.1 住民の声
 - 4.2 課題
 - 4.3 提言
- 5 おわりに

1 はじめに

今回静岡県掛川市横須賀でフィールドワークをするにあたって私は横須賀の町並み保存をテーマにした。それは横須賀について調べて行く中で、城下町の名残がある古き良き町並みに興味を持ったからだ。

二十軒起夫によると、日本では 1970 年代頃から、それまでの高度経済成長に合わせた経済活動重視型のまちづくり（都市開発）に代わって、より良い生活環境、住まい環境などを重視し、歴史的特性に着目した住民主導の新たなまちづくりの動きが各地にあらわれてきた。このような新しいタイプのまちづくりは「持続型まちづくり」と呼ばれる。その先駆けが 1968（昭和 43）年の長野県妻籠宿の歴史的町並みを活かした住民主体のまちづくりであり、これを契機に全国に持続型まちづくりの潮流が広まった（二十軒 2009）。

また、大山琢夫によると、歴史的町並みは他の文化財とは異なり、その中で人びとの生活が営まれている。町並みは地域の人びとの不断の努力によって維持されていく必要があり、また修理修景に対する規制など応分の負担を住民に強いることになる。しかし、住民

の間にも、立場や職種、性別、年齢別などによって町並み保存に対する考え方や利害もさまざまであり、合意形成までのプロセスが困難を極めたケースも少なくない。町並み保存の担い手である地域住民らの意識や考え方を通して地域を考察することは、町並み保存の基礎研究といえる。また、大山は全国の重伝建地区における町並み保存の現状と課題をまとめている。とりわけ、バイパス整備による郊外化と中心市街地空洞化・平成の大合併による自治体内での地域間格差・過疎の進行による集落維持の困難さを指摘している（大山 2009）。

これらの先行研究から、横須賀のまちづくりは持続型まちづくりに当てはまるものではないか、今の町並みが形成されるプロセスはスムーズだったのか、そして町並み保存に対する住民の意識はどのようなものかなどの問いを立て、一週間の調査をした。こうして横須賀の町並み保存の歴史と現在、これからの課題が明らかになった。



写真 1 遠州横須賀街道の町並み（吉川撮影）

2 町並み形成の歴史

2.1 遠州横須賀藩期の城下町

横須賀は江戸時代に遠州横須賀藩、3万5千石の小城下町として栄えていた。清水記久によると、城下町の建設が始まったのは2代目横須賀城主大須賀忠政の時（1588年～）からである。城下町の建設は4期に分かれており、第一建設期（1588～1591年）には本町、第二建設期（1601～1607年）には新町、田町、軍全町が建てられた。第三建設期（1628～1645年）には町人町の新屋町、十六軒町、河原町、侍町の一番町～三番町が建てられた。第四建設期（1645～1682年）には侍町の愛后下、樹木ヶ谷、枕町と石津などの足軽町が建てられ、城下町が完成した。しかし1707（宝永4）年に大地震が起き、町屋全体の約9割の家屋に被害が出るなどして城下町の構造に大きな変化をもたらした（清水 2006）。

現在の遠州横須賀街道沿いは当時の町屋地域であり、そこには西新町、東新町、西田町、東田町、大工町、軍全町、西本町、中本町、東本町、新屋町、十六軒町、河原町が含まれ、この12町は総称して横須賀惣町と呼ばれていた。

2.2 商店街のにぎわいと衰退

この歴史から、横須賀には城下町の名残が町並みにあらわれていた。昭和30年頃になると横須賀は商店街として栄え、昭和40～50年頃がにぎわいのピークだった。昔はどこも商店で、普通の家を探す方が大変だった。袋井～藤枝間を結ぶ軽便鉄道（1914（大正3）年に開通～1968（昭和42）年に廃止）が走っていて、150線と垂直に通る「横須賀銀座」や映画館もあった。何を買うにも揃っていて賑やかで、周りの地域の人びとが「日曜はまちへ買い物へ」と言って横須賀に来たというほどだ。A氏（女性、40代）が小学生の頃は、遠州横須賀街道ももっと沢山の人が歩いていて「いっぱい栄えていただに！」と熱く語ってくれるほどのにぎわいだった。酒屋を営むB氏（男性、80代）は、昔は学校帰りの息子さんに店を手伝わせていたほど忙しかったという。

しかしその栄世はあっという間に廃れ、昭和60年頃には終わってしまった。理由として車社会の到来と大型スーパーの出現がある。人びとは歩かなくなり、大型スーパーへ行くようになった。軽便が無くなって交通が不便になったこともあり、横須賀は周りの町に比べて取り残されてしまった。

2.3 町並み保存の始まり

商店街の衰退と同時に、町並みも壊れ始めた。それは1972（昭和47）年の田中角栄の「日本列島改造論」をきっかけに、近代的なまちづくりが推し進められたからだ。また、大学・結婚・就職で住む人がいなくなる、家が古くなる、空き家になるなどの問題が積み重なったことも原因だ。当初こうして壊れて行く町並みについての議論はなく、気にする人もいなかった。そして徐々に住民の間で「良いものが無くなってしまうなあ」「今の状況を何とかしたい」という思いが芽生え始め、現在に至る町並み保存に繋がった。

1983（昭和58）年に、国の住宅政策事業であるHOPE計画が提示された。この計画は、「地域に根ざした住まい・まちづくり」をキャッチフレーズに地域に視点を据え、本当に豊かな空間の創造、また文化運動としての要素も盛り込んだものだった。1991（平成3）年に大須賀町がこれを採択したことをきっかけに、横須賀で本格的な町並み保存運動が始まった。そして行政に頼らない住民主体の「横須賀のまちなみを考える会」が1993（平成5）年に、住民の技術職集団である「大須賀建築士すまいの研究会」が1991（平成3）年に二本立てで立ち上げられた。「遠州横須賀倶楽部」も町並み保存に大きく関わってきたが、1987（昭和62）年の発足当初は町並み保存のことはあまり考えていなかった。主にこれらの民間組織に加え、「掛川観光協会大須賀支部」が町並み保存に関わってきた。とはいえ、HOPE計画採択当初の約5年間は須賀町長による行政指導であり、受動的だった。行政

がコンサルタントを呼んだり、横須賀と同じような立地条件でまちづくりが盛んな由比蒲原や富山県の八尾（やつお）の視察に行ったりした。次第に住民主導で町並み保存に関するルールブックをつくり、住民と一緒に町を見て問題点を探ることもするようになった。

しかしこうして町並み保存が始まって、住民の意識は「好きにやってくれや」というもので低いままだった。むしろ古い町並みを卑下していた。この意識を一転させたのが、1999（平成 11）年から始まった「遠州横須賀街道ちっちゃな文化展」である。この文化展に来る文化人に「良い町並みだねえ」と言われてようやく、住民が町の魅力をわかり始めた。それからは多くの住民が町並み保存に協力的になった。もちろん批判もあったものの、町並みに合った家に改築する、平入にする、景観にそぐわない色の家の壁を塗り直す、道路沿いに駐車場をつくりその後ろに家を建てる形式のセットバックを避ける、家の周りをきれいにするなど努力をしてくれた。

その後しばらく町並み保存の活動はなかった。しかし近年人（特に子ども）も家も減り、祭りができるかもわからない状況に陥った横須賀の人びとは再び危機感を持ち始めた。民間組織に携わる人びとは発足当時より年齢的に時間の余裕ができ、熱心に町並み保存活動に取り組むようになった。その成果が 2014（平成 26）年の、約 700m の遠州横須賀街道の景観形成重点地区認定である。景観形成重点地区とは、景観づくりにおいて積極的な取り組みが必要であると認められた地区のことである。とはいえ届け出義務などにおいて強制力のないゆるいルールしかない。今回区域を 700m に限定したのは、2km あれば間口の大きさや建物の条件、人も違うが、この 700m はだいたい同じ構造だからだ。いずれは町並み保存のスローガンである「柵の似合う町並み」に合わせ、12 町の柵の運行ルートを含む 2km の認定を目指す。

住民の中には町並みにそぐわない自分勝手な家を建てる者もいる。そんな住民に建築・改築計画の助言をするために、2016（平成 28）年に景観整備機構が発足した。この組織のコンセプトは、法律で縛ることなくゆるい基準で町並みを保存していくことだ。

3 横須賀ならではの町並み

この節では横須賀の町並みの特徴を提示していきたい。

3.1 コミュニケーションのとれる町並み

まず、狭い道幅が大きな特徴だろう。かつて「横須賀は道が狭くて車がすれ違えない」と文句を言う住民がいたというように、一般的には狭い道幅は危険かもしれない。しかし、遠州横須賀倶楽部の C 氏（男性、50 代）はかえって強みであると考えている。なぜなら、道が狭いと自然と車は徐行して事故は少なくなるし、運転者同士でアイコンタクトをとれば安全だからだ。さらに、そのアイコンタクトはコミュニケーションになる。また、道路を挟んだ人同士が声をかけられる道幅の狭さは、人間味あふれた道である。C 氏は、横須賀の特

徴は、生活感のある町並みであると話す。それには何よりも人がメインで、コミュニケーションがとりやすい環境・構造が大事になる。このように横須賀はルールよりもモラルを優先して、地域住民の絆を大切にしている。

外から家の中の生活の様子が見えるのも特徴である。これには、祭りの時に部屋から祭りを眺められるようにするためという説もある。今回 C 氏に話を聞いている間、外を歩いている人が家の中の C 氏とあいさつを交わす光景が見られた。これからの高齢社会においても、この気軽に声をかけられるコミュニケーションをとりやすい構造がとても良いと C 氏はいう。祭りの時だけでなく、普段から勝手に家に入るのはよくあることだという。今でも宅配が来て留守の時には近所の人に荷物を預かってもらうという、マイペースな住民との繋がりもある。

3.2 うなぎ寝床

各地の旧宿場街に残っている家々と同様に、うなぎ寝床もまた大きな特徴だ。うなぎ寝床とは、間口が狭く奥行きのある建築様式である。横須賀には多くのうなぎ寝床があるが、それには遠州横須賀藩期の間口税が由来している。当時間口税というものがあり、間口が広いほど高い税金がかかった。そこでどこも最低の間口で家を建てた代わりに、南北に長い構造のうなぎ寝床になったのである。

うなぎ寝床にはデメリットが多い。住民の多くが日当たりが悪く暗いこと、壁の強度のバランスが悪く耐震性に弱いことを挙げていた。他にも幅が狭い、背が高い、寒い、火事の際にお隣さんの火が燃え移る可能性などのデメリットがある。次項で述べるが、お隣さんとの間隔の狭さもあり、そこから生まれるトラブルもあった。こういったデメリットの多さから出て行ってしまう人もいたし、他所からの嫁入りもしにくかった。

多くの住民は古い家を直して住んでいきたいという思いが強く、リフォームを選択する。その際このデメリットをどう改善するかが重要になる。この問題に関わってきた大須賀建築士すまいの研究会の D 氏（男性、50 代）に話を聞いた。D 氏はうなぎ寝床ならではの家の設計を手掛けている。まず、いかに明かりを入れるかで窓にこだわった。隣の家と窓がかち合わないよう窓の位置を高くする、風を通す窓、明かりを入れる窓、景色が見える窓というように、位置によって窓の役割を変えた。他にも駐車場の色を変える、車を多く停められるようにする、中庭をつくるなどの工夫をしている。また民間組織の中で、うなぎ寝床がモデルの「横須賀ならではの住まい方を提案します」というパンフレットをつくる活動もした。

3.3 平入

次の特徴は平入（ひらいり）である。平入とは、屋根の棟に対して直角に切り下した側を妻（つま）、棟と並行する側を平（ひら）とした場合、建物の出入り口が平にあるものをいう。逆に出入り口が妻にあるものが妻入である。昔ながらの家のづくりは妻入で、か

つて横須賀の家のほとんどは妻入だった。しかし、前述したようにうなぎ寝床はお隣さんとの間隔が狭いため、妻入の場合家の雨水がお隣さんに落ちてしまい、落とされた方は不満が募っていた。こうした雨水トラブルは平成初期まで頻発していた。このトラブルを解消するために多くの家は平入に改築された。平入は近年にできたうなぎ寝床のデメリットに対応するための特徴である。

3.4 祢里の似合う町並み

横須賀といえば祭りである。もちろんそれは「祢里の似合う街道の継承と創造」というスローガンにあらわれているように、町並みにも反映されている。たとえば、十六軒町と河原町を結ぶ新橋には祢里の車輪がデザインされている（写真 2）。現在は撤去されたが、かつて西本町に祢里の運行を妨げないための可動式の信号機があった。同じ理由で道路にはみ出た瓦屋根を削った家もある。前述の狭い道幅も祭りと絡められ、祭りに賑わいをもたらす。西田町や東田町は川が埋め立てられて道が広くなった。しかし、祭りの良さの一つに、祢里を曳く人と見る人の距離が近いことがあり、広い道幅は横須賀にそぐわないとの声もある。歩道と車道を分けて段差をつくってほしいという要望もあったが、そうすると祭りの際とても大変になるためつくらないでいる。

横須賀の町並み保存の特徴は強制しないことだ。住民には「祢里の似合う町並み」をイメージさせるだけで、家づくりは住民に任せる。住民主体を大事にし、あくまで主導者側は提案をするだけである。行政との関わりはないため補助金はないが、その方が自分たちの好きなように楽にできる。たとえば、使い道の限られた補助金では張り付けられたような町並みになってしまう。地域には地域に合ったやり方があり、横須賀は行政と関わらない方がうまくいくのだ。



写真 2 新橋にデザインされた祢里の車輪（吉川撮影）

4 これからの町並み保存

4.1 住民の声

横須賀の町並みについて住民にインタビューしたところ、様々な意見があった。

まず、町並みを残していきたいとは思わないという意見があった。今残されているのは昔風の風景で、本当に昔からある建物は少ない。一人暮らしと二人暮らしの家が多く静かだという。横須賀は置き去られてたまたま残ってしまった町で、そこまで古いものが残っているわけでもないとの声もあった。

また、残していきたいと思うものの、今のやり方に賛同できないという意見もあった。家を建て替えた E 氏（男性、70 代）の考える町並み保存は、本当に残すことである。本当に古い家は地震に弱く、お金をかけて強くしなければならない。100 年後も残る町並みづくりをしているのは自分たちの方なのに、そんな古い家がある地域が景観形成重点地区に認定されている。新しい家でも構わない。自分がお金を出して建てる一生ものの家を、古い町並みを残したいからといって誰かに批判されるべきではない。E 氏はつぶれた家が一軒もない岐阜県今村の町並みを絶賛していた。景観形成重点地区の区域に関しては、区域外の人の中でも不満がある人とあまり気にしない人もいた。

結果的には、町並みを残していきたいという声は多かった。城下町の名残があるこの町並み、古い建物や神社、祭りを残したい。祭りには祢里の見栄えが良くなるような景観が必要だという。今はちっちゃな文化展や祭りといったイベントの時しか外から人が来ず、他にとりえもないので、町並みを見に人が来てくれたら嬉しいという人もいた。

家を改築した何人かの人に話を聞いたところ、皆今の住まいを気に入っているようだった。E 氏宅はまさにうなぎ寝床で、火事の際逃げられるように階段が 2 つあるのが特徴だ。特に不満はなく快適だという。F 氏（男性、50 代）は 13 年前に家を建て替えた。建て替えは全て同級生だった D 氏にお願いした。D 氏は自分が手掛ける家が横須賀らしくするよう努めている。F 氏は 100% の住みやすさは存在せず、昔の家を引き継ぐにもメリットとデメリットがあると考えるが、満足度は高い。

4.2 課題

今後の町並み保存への課題は沢山ある。

今も昔も空き家やつぶれそうな家が課題であるが、なかなか新たに住み着く人がいない。それには一部住民が指摘するところの横須賀の排他性が関係している。G 氏（男性）と H 氏（男性、50 代）に話を聞いたところ、G 氏はその原因は祭りにあるという。横須賀に住む人は他の町の法被は着たくないで、横須賀内の他の町に移れない。他所から移住したくても、祭りが嫌いだったら高い町内会費を払ってまで住みたいとは思わない。H 氏は若い頃一度横須賀を離れて帰ってきた時に、横須賀は閉鎖的な町だと感じたという。横須賀

は新しい人を受け入れにくい、コミュニケーションがうまくいかない。たとえば、横須賀に婿入りしてきたお婿さんが新居を建てたときに、上の世代の方で「あの人たちはよそ者」という人がいた。よそ者意識がある間は横須賀は伸びない、気持ちがいまいちと話す。

今後の商店の動向も心配だ。今も商店は少ないが、どこも後継者問題が深刻で、今の代を最後に店仕舞いする商店がほとんどだという。いずれ横須賀には個人店が無くなり、コンビニと大型店が残るさみしい町になると嘆く人もいた。高齢者にとっては、歩いて行ける距離に八百屋がないと苦労する。

電線に不満を抱く人は多い。何と言っても祢里の運行の邪魔になる。電線が地中化されたら、町並みはだいぶ変わるだろう。だが地下には下水道が通っており予算もないため地中化は現実的ではない。また、駐車場不足、防災対策、景観に合ったデザインのコスト・維持管理問題、新築・改修時の助成がないことなどがある。海野芳幸によると、横須賀外の周辺域の携帯電話電波塔、風力発電施設も町並みの大きな景観阻害要因となっている（海野 2010）。

民間組織のPRが下手なことも課題だ。町並み保存活動をしている民間組織はほとんど同じメンバーで構成されており、住民全体へ情報が行き渡っていない。そのため小祢里（ちいねり）による次世代の地域づくりの担い手の育成を視野に入れている。お金をかけてパンフレットなどを作っても、住民の認知度は低い。住民にとってはそのPRはマンネリ化していて、刺激がない。そのような時に、外部からの研究者や私たちのような学生が来て刺激を与えると、住民は町の良さに気付く。世間の人と言われるようになると、自慢の町になるという。

ごみネットの色が景観にそぐわないのも目に付く。今後、とりあえず街道区域だけ色を変えようという意見が出た。このねらいは景観形成重点地区に認定されたからこういうことができるという意見がある。また、前述したように景観形成重点地区の認定地区からはずれた人びとの中には、仲間外れ意識を持つ人もいる。理由を説明しても、住民の理解を得るということはすごく難しい。ここでD氏は、まちづくりは誰のためにやっているのかということを再考してほしいと話す。町並みは住む所である。誰のためでもなく、自分の町だからやるものだ。この認識がある人びとは、積極的に町並みを考えた建て替えやリフォームをしてくれる。上辺だけの建物はだめだ。まちづくりは人づくりである。

4.3 提言

今回の調査を通して、私はこの町並みを残していくべきだと感じた。一つに、この城下町の名残がある古い町並みは、なかなか他所では見られない貴重なものだからだ。これは私が他所からやって来たからこそ感じたのだと思う。直井岳人らによると、観光客は、訪問先において「日常から区分されるような様相」へとまなざしを向ける。歴史的事物は観光者の日常とは異質であり、観光者のまなざしの対象となり得る様相の一つである。歴史的事物が訪問客に提供する「過去を味わう機会」が主な魅力であり、歴史的町並みにこれ

が内包されているという（直井ほか 2014）。私も横須賀の歴史的町並みにこのまなざしを向けた。そして調査を通してわかったのは、住んでいる人びとは自分の町の魅力に気付きにくいということだ。このことは事前調査の段階で知っていたが、本当にそうなのかと半信半疑だった。しかし、一旦横須賀を離れた人や横須賀に居住してきた人、ずっと住んでいる人など様々な住民の声を聞いて、それが本当のことだとよくわかった。町並みを残していくには、いかに住民に横須賀の魅力をわかってもらうかが重要だ。それには外部からの訪問者の意見がほしい。多くの人は初めて横須賀に来たら、昔にタイムスリップしたような歴史的町並みにまなざしを向け、魅力を感じるだろう。

また一つに、「祢里の似合う街道の継承・創造」にあるように祭りとの調和がある。近代的で交通ルールを優先した横須賀の町並みを想像してもらいたい。祭りの存在が大きい横須賀では、そのような町並みではせっかくの祢里も映えないだろう。住民が町並みの必要性を理解すれば、自然と民間組織の活動に興味をもち、町並み保存に積極的になるのではないと思う。これだけ横須賀のまちづくりに手を尽くす人が多いのに、住民との間に温度差があるのはもったいないことだ。少なくとも私が住んできた町で、住民がこれだけ積極的なまちづくりをしている所はなかった。彼らの努力のすごさも、横須賀にいとわかないことなのかもしれない。

5 おわりに

今回の調査を通して、横須賀はまさにより良い生活環境、住まい環境などを重視し、歴史的特性に着目した住民主導の持続型まちづくりをしてきた町だということがわかった。そこでは横須賀ならではの様々な特性を生かした町並み保存が展開されている。最も印象に残ったのは、横須賀では祭りの存在がとても大きいことだ。調査前は「祢里の似合う町並みの継承・創造」というスローガンについて深く考えることはなかったが、調査を通して、目指す町並みはそこにあるということがよくわかった。一週間という短い期間だったが、いい人が多く人と人との繋がりが深い地域だと感じ、名残惜しくなった。これからもこの町並みと伝統が残っていったほしい。

参考文献

海野芳幸

2010 「歴史的特性のある町並み景観の保全継承に関する一考察—掛川市横須賀街道の町並み保存の事例—」『日本都市計画学会 都市計画報告集』9: 23-26。

大山琢夫

2009 「歴史的町並み保存に関する研究動向」『史学論叢』39: 50-64。

清水記久

- 2006 「遠州横須賀城下町の変遷過程と地域構造」『国士館大学地理学報告』14: 47-58。
直井岳人・十代田朗・飯島祥二
- 2014 「歴史的町並みにおける訪問客のまなざしの差異と町並みの印象との関係—岐阜県
高山市の歴史的町並みをケースとして—」『日本観光研究学会機関誌』26(1):
47-60。
- 二十軒起夫
- 2009 「歴史的町並みを活かしたまちづくりにおける市民活動の多様な取り組みと地方
自治体の役割についての事例比較研究—奈良町と今井町に学ぶ—」『法学研究』
11: 157-177。